
フェイクヒーローズ・オンライン

上屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェイクヒーローズ・オンライン

【Nコード】

N2106Z

【作者名】

上屋

【あらすじ】

あらゆる特撮ヒーローを再現できるVRMMO、「ヒーロー&ヒーローVSオンライン」、主人公、木島はかつて失った夢を埋め合わせるようにゲームに埋没していた。

レアスキルとされる「正義」も、ただ宝の持ち腐れとする日々。

しかし、ゲーム内で開催される対人戦イベントの賞金に釣られた木島は、数千人を巻き込むデスゲームへと挑むことになる。

そこは偽りのヒーロー達の楽園。

ヒーローにはなれず、それゆえに彼らは偽りを楽しむ。
しかし男は、「正義」を背負い、真のヒーローとなるために戦いを
始める。

第一話 「ステーキ」 1 (前書き)

「変身！」

(仮面ライダーシリーズより/全ての仮面ライダー)

第一話 「ステーキ」 1

風が、凧ぎ、ぬかるむ。

闇の底で闘争が幕を開けた。都市の熱風をかき分け、異形が動く。

グア アアウ ウオオオ …… ツッ！

唸り、咆哮。筋肉が膨れ上がり、血管が生々しく這いずる腕、鉄槍の如く尖った五指の爪が薙ぐ。

黒い影が跳びすさった直後、背後の薄汚れたビル壁が切り裂かれ、崩壊。

薄暗闇の路地裏、照らされるは異形の肉体。大きく発達した両の腕、対応するヒッティングマッスルが搭載された肥大する背中からは湯気が上がる。そして、両端から牙の飛び出たイノシシを想起させる顔面。

しかし、異形の野獣の両眼には、人の魂の光をたたえていた。

それは、人の形をした獣^{イノシシ}だった。

「セイツッ！」

野獣に対峙するは、黒の人影。牽制のジャブから、右ロー、顎を穿つ左ストレートの流れるような連撃。

「ゴゴッ！」

鈍く唸り、野獣が後退。太く逞しいその肉体に、人影の攻撃は確実にダメージを与えている。

漆黒の空、不意に厚き雲の狭間から月の光が刺した。人影が、都

市の裏側よりその真の姿を表す。

暗黒の装甲、表面に走る血管の如き朱のライン。

輝く純白の巨大なマフラーが、風の澱む路地裏でたなびく。

そして、頭部をヘルメット状に覆う仮面には、昆虫を思わせる複眼パターンの二対のゴーグル、二対のアンテナ。

まるでドクロのようにも見えるデザインは、肉を削ぎ落とした人間の本质を突きつける鋭い酷薄さを持っていた。

黒の魔人が、都市の闇の中で野獣と相対する。

「ダア、ダアレダア、ギザマアツツ！」

吠え声と共に人成らざる声で野獣が問う。

「……俺か？ 俺はなあ」

答えより速く、野獣が距離を詰めた。巨大な肉塊が、コンクリートを踏み割り疾駆。ドクロの魔人へ、牙を鳴らし喰らいつく。

『dead end mode set ready!』

朱の光を放つ、ベルトのバックル。そこから響く無機質な声。

ベルトから伝わる破壊の光が、右足へ向かう。収束した赤光が煌々（こうこう）と輝いた。

足を広げ体を開く、姿勢を落とし構える。

野獣の突進、その重撃にカウンターの照準を合わせ、攻撃本能を解き放った。

「　　ツツ鋭！」

魔人の体がコンパスのように真横に回転、軸足の裏から煙が上が

る。

轟速の右回し蹴り、シャープな軌道で吸い込まれるように野獣の左胸へ。

『 ignition!! 』

バツクルが咆哮、同時に右足の光が炸裂。

ゴッ！！

路地裏で爆音と閃光が乱舞。野獣の巨体を派手に吹き飛ばし、ビル壁へと叩きつけた。超重量に壁が陥没、巨体が埋まる。

「……俺の名、か」

野獣を撃破した体勢のまま残心を崩さず、魔人が呟く。

それは、守護する者。それは、闘う者。それは、打ち貫く者。

汝、その名は、

「マスクド 仮面ライダー ステーク」

闇をまとい、魔人は都市の影へ消えていく。

「いつやああ、どこもありがとございましてユツキーさん！」

ペコペコと頭を下げながら、マスクドライダーステーク ユー

ザー名：ヒダ ナオト 本名：キシマナオマサ 木島直正 は先程蹴り飛ばした野

獣 外装名：エレキック・ボア ユーザー名：ユツキー に近づいていく。

「いやいやオタクもなかなかアクションにキレがあるね！ ヤラレ役冥利に尽きるよ」

ガラガラと瓦礫をかき分け、巨体が上がる。野獣はその双眸を木島に向けた。

近づきながら、魔人の体から光が発生、外装が空間へ溶ける。表れるはTシャツとジーンズのラフな格好。黒髪、黒眼のこれといって特徴のない日本人として標準的な青年。特に大きくイジっていないキャラクターメイクの印。

「やっぱユツキーさんに頼んでよかったですよ、噂通りのヤラレっぷり！」

満面の笑みで野獣を讃える木島。立ち上がる野獣。ユツキーと軽く握手。

「いやいや、ゲーム上とはいえ、一応お金貰ってるからさ、満足してもらえりゃ嬉しいよ。……あ、最後のキック、もっと派手めなやつでも良かったんじゃない？ ポーンと高く飛んでもさあ」

太い右腕を空へ跳ね上げるイノシシ。その仕草を、先程とは打って変わって苦い表情で見つめる木島。

「あー、俺的にはその……地に足つけたアクションのほうが……」
「あ、あんま派手じゃなくて、泥臭いやつの方が好み？ まあ、その辺はやっぱり人それぞれの趣味だね」

気さくな調子を崩さず、ユツキーが話を続ける。

「CGのド派手な必殺技もいいけど、地道なアクションもスーツァクターの腕が出るから……」

「あ、あのー……」

盛り上がるユツキーに、濟まなそうな声をかける木島。

「実は、そろそろ例のイベントが始まるんで、おいとましますね」

「え？ ああ、ヒダさん、例のGM主催イベント行くの？ 僕も行くのかと思ってたけど、これから仕事でさあ、じゃがんばってね！」

獣面を歪ませ、爽やかな笑顔を送るエレキック・ボア。その体が徐々に透けて透明化、虚空に消える。ログアウトのエフェクト。

同時に背景である夜の路地裏も崩壊。0と1の情報の羅列に還るビル、ゴミ箱、アスファルト。

後には殺風景な真っ白い部屋に木島が一人、佇むのみ。

「……派手なヒツサツワザ、俺だってやりたいけどさあ」

白の空間。レンタル制のパーソナルイベントスペースで、木島の己にしか聞こえない呟きが響く。

第一話、「ステーキ」2（前書き）

「知ってるかな、夢っていうのは、呪いと同じなんだ。呪いを解くには夢を叶えるしかない。」

けど、途中で夢を挫折した者は、一生呪われたまま……らしい。

あなたの罪は、重い。」

（仮面ライダー555より/ホースオルフェノク）

第一話、「ステーキ」2

20XX年、発達した新インターフェイス技術は、軍事目的からの更なる洗練と強化を経て、ついに一般の民衆にその恩恵を甘受させた。

身体感覚と操作を直結、タイムラグなく、より直感的にヴァーチャル・リアリティー内のアバターを操作できる新インターフェイス技術は、遂にVRMMORPGとして多くの人々に受け入れられていく。

そして乱立していく様々なVRMMORPGは、差別化のための多種多様化した要求に応えるいわゆる「ニッチ」向けの物が増加していく。

そして、青年 木島が選んだゲームは中でも「特撮オタク」向けの方向性を持つ作品だった。

「男として生まれたからには、『ヒーローになりたい』と思わなかったやつはいない」

それが木島の持論だ。

そして、木島はそれに従った。

幼き頃の夢を叶えるため、少年の頃から必死にヒーローになる道を探した。

その中で「真の正義の味方はいない」、「真つ当な正義感だけでは世の中では生きられない」ことを学んだ。

だがそれでも夢を諦めきれず、青年はある施設の門を叩く。

「スーツアクター養成所」そこで彼はいつか子供のころに見たヒーローになるうとした。せめて、あの頃の自分のように、子供に夢を見せる仕事がしたい。ただその一念で。やがて熱意を認められ、入門となる。次々とカリキュラムを受けながら、いつか自分がヒーローになる日を待ち続けた。

だが、その日は来なかった。

俺だって、やってみたいけどさあ。

取り外したベルトのバックル 「変身」のためのアイテムを握り締め、木島は過去を噛み締める。

俺じゃ無理なんだよなあ。

スーツアクターの練習中、木島は同期生との高所からの着地に失敗、左足を粉碎骨折している。

怪我自体は時間はかかったが、完治はした。だが、スーツアクターとして最も必須のものは治らなかった。

共に落ちた同期生は腰椎を損傷、下半身不随となり、木島もまた高所恐怖性になってしまった。

事故の責任その物は木島にはない。だが、スーツアクターの夢を立たれた同期に対しての自責の念を抱えたまま木島は「跳べない男」として、夢を諦める。

スーツアクターを諦めた木島は、サービス開始直後から始めていた「ヒーローアンドヒールVSオンライン」にただひたすらのめり込んだ。失った夢を、埋めようとするように。

両親はすでに他界、身内は叔父夫婦ぐらいしかいない木島にはゲ

ームのみが寄りどころとなる。

実際、ゲーム内はゲーム内通貨とキャラクターレベルさえあればおおよそあらゆる「特撮ヒーロー」を再現することが出来た。

その中で木島は「マスキドライダー」を選んだ。初期に選べる「基本ヒーロー」の一種だが、今なお毎年新作が作られるため、非常に人気が高い。なお基本ヒーローには他にもレンジャーなどがあり、レベルが上がれば上位ヒーローの「ギガント」や「スペースDK」などにもなれる。

さらにはゲーム内通貨により、多種多様な必殺技やマシンも購入出来る。キャラクターデザインも、撮影会社の協力で既存のヒーローからオリジナルまでも幅広く選択が出来るのだ。

木島は、子供の頃に考えていたオリジナルライダーにこだわった。ゲーム内でモンスターとして表れる怪人を狩り、必死にアイテムや通貨を稼ぎ続けた。

気がつけばレベル95になっていた。カンストのレベル制限は150である。はつきりいって、同じ時期に初めたプレイヤーの中ではかなり低い。

基本的に経験値は二の次で金ばかり追い続けた結果だが、稼いだ金の大半は購入資金と、ヤラレ役の仕事をする怪人のプレイヤーへの報酬で消えていた。とにかくこの「ステーク」の外装には貢いでいる。

高く跳躍するなど、自分には扱えない必殺技もついつい装備させてしまった。

バイクとか装備とか結構高いんだよなあ、……これ売れないかなあ？

立体ディスプレイで自分の保有スキルを確認。「獲得資金増加レベル3」や「腕力強化レベル4」などの必須や死にスキルがずらずらと並ぶ。視線はその最奥へ。

初期スキル：正義レベル1

レアスキル、らしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2106z/>

フェイクヒーローズ・オンライン

2011年12月11日23時58分発行